

令和元年 12 月 25 日

令和元年度国立大学図書館協会海外派遣事業 参加報告書

神戸大学附属図書館

有馬 良一

令和元年度国立大学図書館協会海外派遣事業により、シンガポールの大学およびポリテクニクの各図書館を訪問し、各校における学修支援に関する調査を行ったため、その内容を以下の通り報告する。

1. 派遣期間

令和元（2019）年 10 月 7 日（月）～ 同月 11 日（金）

2. 訪問先機関および連絡担当者

- ・ National University of Singapore (Central Library) / Mr. Patrick Pu
- ・ Singapore Polytechnic Library / Ms. Denise Ong
- ・ Nanyang Technological University (Lee Wee Nam Library) / Mr. Frank Seah

3. 調査研究テーマ

シンガポールの高等教育機関附設図書館における学修支援：レファレンス業務・情報リテラシー教育を中心に

4. 調査研究目的

「高等教育のための情報リテラシー基準（国立大学図書館協会，2015）」や「Framework for Information Literacy for Higher Education (ACRL, 2016)」に見られるように、高度情報社会のなかで情報リテラシー教育を中心とする学修支援の重要性が高まってきている。

本調査の目的は、先進的な取り組みを積極的に行っており、国際的にも存在感を示しているシンガポールの研究大学、および同国で職業教育を担うポリテクニクにおける学修支援活動について、特にその提供方法や内容、および他部局・教員等との連携の側面からインタビュー調査を行うことで、その実情や具体例を学び、今後の業務の参考とすることである。

5. 調査研究結果

National University of Singapore (NUS: シンガポール国立大学)

NUS での情報リテラシー教育は、主に図書館主催のワークショップである Researcher Unbound, 各学部の講義にライブラリアンが参画して行う講義, そして LibGuides を利用したサブジェクトガイドによって提供されている。Researcher Unbound をはじめとする種々のワークショップは、植物の葉の形を模して 7 種類のリサーチ・スキルが図示された Research Skills Framework (RSF) の各領域を意識して行われている。

Researcher Unbound は 1 回完結型のワークショップのシリーズであり、その内容は研究支援のた

めの側面が強い。そのため学部生も参加可能ではあるが、主な対象は修士や博士課程の学生など若手研究者である。講師はライブラリアンが務める回も多いが、学生に様々なサービスを提供している他部局と連携して行うものも半数近くにのぼる。また本ワークショップには調査・研究の面で教員をサポートする事務職員も多く参加しており、学生・研究者にとどまらないより広範な範囲に情報リテラシー教育を提供していることが分かった。また Researcher Unbound のブランディングのため、たとえば外部企業などから講師の打診があった際には、内容についてあらかじめ先方とディスカッションなどを行うことで、開催の可否を決定しているとのことだった。

各学部／大学院と協働して行う講義は、多くの場合、図書館側が連携できそうな教員や部局をターゲットとして定め、重点的にアプローチを行うことで実施に至っている。いくつかの講義やプログラムでは、ライブラリアンがエンベディッド・ライブラリアンとして継続的に講義に協働して参画しているケースもある。図書館からのアプローチは、学生の課題などに関連して、図書館がサポートできることをアピールすることから始まることが多く、その中では文献の検索方法やデータベースの使い方だけでなく、問いの立て方や情報評価の基準などについても講義している。

また NUS では LibGuides を使用してサブジェクトガイドを作成している。作成されたガイドは上述したワークショップなどと連携して利用されることも多く、学内構成員への周知も図られている。ガイドの内容は、基本的に各ガイドを作成したサブジェクトライブラリアンによって管理されるが、年に一度全ガイドを対象にしたレビューが行われ、閲覧数の少ないガイドや古くなったガイドを削除／非公開するよう提案がなされるなどガイドの鮮度を保つ仕組みが構築されている。

レファレンス業務は基本的に e メールで行われている。これらの質問は担当のライブラリアンが web 上の管理画面で確認できるようになっており、質問内容に応じてそれぞれのライブラリアンにレファレンス質問を振り分けている。また、これらの質問と回答は管理画面から確認できるようになっており、不正確な回答や不十分な回答が行われた場合にはそれを他のライブラリアンがフォローできる仕組みとなっている。

Singapore Polytechnic (SP: シンガポール・ポリテクニク)

ポリテクニク（理工学院）は職業教育のための高等教育機関であり、シンガポール内には5つのポリテクニクが設置されている。このうち SP は 10 の学部（スクール）から構成されており、各学部には担当のスクールライブラリアンが 1～2 名程度配属されているが、1 人のライブラリアンが複数の学部を掛け持ちすることもある。

SP Library では、ライブラリアンの数が少ないため、図書館が主催となって情報リテラシーに関するワークショップを開催することはなく、情報リテラシー教育は基本的にすべて web 上で提供されている。これら e ラーニングのためのコンテンツ・モジュールは、シンガポール国内の5つのポリテクニクが共同で運用するポータルサイト Polymall で提供されている。Polymall 上のモジュールは各学部のプログラムと連携して作成されており、各学部のいくつかのコースを修了するためには、指定された Polymall のモジュールを履修することが必須となっている。そのため、多くの学生が図書館の作成した情報リテラシーに関するモジュールを受講することとなっている。

また SP においても LibGuides がサブジェクトガイドとして利用されている。そのコンテンツの多くは学部のコース・モジュールの内容に関連したものであり、学部の教員からの要請を受けてスクールライブラリアンが作成・公開している。

SPにおいてもレファレンス質問はeメールで受け付けることが多いが、利用案内などの平易な質問に関しては、webサイト上に Temasek Polytechnic と協働で運用しているチャット bot を設置しており、利用者が質問を選択する、あるいは入力することで回答や必要な情報が掲載されたページが表示されるようになっている。

Nanyang Technological University (NTU: 南洋理工大学)

NTU の図書館では、組織の改編によって、3年前には30名以上いたサブジェクトライブラリアンが、Advisory and Consultation Team に所属する8名に集約されたことで、図書館主催で学部生向けの情報リテラシープログラムを行うことが難しくなり、現在学部生向けにはweb上にモジュールを作成・提供することによって情報リテラシープログラムを提供している。これらのモジュールは現在フェイクニュースや著作権などに関する8つのユニットから作成されており、それぞれのユニットには学生と共同で作成したアニメーションやクイズなどが盛り込まれている。

このほか、学内者であれば誰でも参加可能なワークショップが定期的開催されている。その内容は、データマイニングの手法や文献マネジメントツールの使い方など研究を効果的に進めるためのものや、データビジュアライゼーションやプレゼンテーションに役立つツールの紹介など研究成果をより効果的に発表・発信するためのものが多い。加えて、院生などが学修・研究に関するプログラムを発表する場も図書館では提供しており、院生からの申込によってこれらのプログラムが図書館との協働で開催されることもある。

また図書館の主催ではないが、学内の他部局が主催するプログラムや講義に継続的に参画して、情報リテラシーに関する内容を講義したり、実際に文献検索のテクニックや情報の評価方法についての講義を行ったりするなど、他部局との協働によって多数の学生に情報リテラシー教育を提供する機会を得ている。

NTUでもサブジェクトガイドを作成・公開するためのツールとしてLibGuidesが利用されており、各ガイドはそれぞれの主題を担当するサブジェクトライブラリアンによって作成されている。NTUにおいてもこれらのガイドは毎年レビューを行って、質を担保している。

レファレンスに関しては、基本的に各ライブラリアンがeメールで受け付けることが多く、ついでwebフォームでの受け付けが多いとのことであった。またNTUにおいてもwebサイトにクイックレファレンス用のチャットbotが設置されており、利用案内などはこちらでも対応できるようになっている。

今回調査した各校では、情報リテラシー教育において、入手した情報の評価について非常に重視しているとともに、特に研究大学では情報の入手から発信まで研究の各フェーズにおいて役立つワークショップやweb上のコンテンツを整備・提供している点が特徴的であった。このように研究の流れ全体を意識した学修・研究支援のあり方は日本においても需要があろうし、大いに参考にできると考えられる。あわせてweb上のリソースを用いたサブジェクトガイドやeラーニングのためのコンテンツの公開は頻繁にワークショップを開催できない場合に有効であり、またこれらは場所や係を問わず各自が作成・管理できるため、異動の多い日本の大学図書館においても比較的取り入れやすいのではないかと推察される。